

登り、平和になった世の中に感謝しながら余生を
妻と二人で楽しく過しております。

海軍機雷学校生として

群馬県 阿部 精

私は昭和三（一九二八）年七月十九日、代々下駄屋を商んでいた阿部家の六人兄弟の次男として生まれました。

昭和十八年ともなると戦争はますます拡大しており、私たち子供も、毎日が戦争ごっこ遊びであつた。

昭和十八年三月、古馬牧南国民学校を卒業して家業の下駄材料等の仕事を手伝っていたが、五月十八日、海軍志願が合格して横須賀第一海兵団に入団することとなった。当時男子の若者のほとんどが軍隊を志望した時代でした。

私は海軍機雷学校を志望して第十期普通科水測術練習生として八カ月間の教育を受け、特に電波探知機による電波信号教育の訓練を受けた。少しでも信号が間違つたりすると、「海軍精神注入棒」

で、全員の尻が真赤になるまでやられるのであった。このような厳しい訓練を昭和十九年一月下旬まで続け、卒業することができた。卒業すると特定員として予備学生の教班長付になった。そして予備学生に対して、今まで訓練を受けて来た信号術を中心として種々の教育訓練に努めた。

昭和十九年四月下旬に船舶警戒隊員として門戸港に派遣され、同年兵と共に軍御用船「帝風丸」に乗船し、陸軍兵士や兵器、諸物資等を満載して南方方面に向って出航した。港の武官府の屋上からは手旗信号にて激励を受けつつ祖国に別れを告げ、船は太平洋に乗り出した。そして途中、敵の攻撃にも遭うことなく台湾の高雄港に入港した。この日五月二十八日は海軍記念日だったので、岸壁では現地の婦人会の方々が湯茶等の接待をしてくれたのが忘れられない。

高雄港には二、三日停泊後、碇を上げて真暗な南シナ海を南下して、フィリピンのマニラ港に上陸することができた。

途中東沙郡島を過ぎた所で船団の同僚船が敵の潜水艦の魚雷攻撃を受け轟沈、兵員も物資もすべて一瞬にして海中に消えたが、運良く私の船は無事だった。ここマニラの街は物資が安く五円もあれば一日楽しく遊べた所だった。

十月下旬は第一次台湾沖航空戦の最中であり、大本営発表では多大な戦果ありとの通信があった。輸送船はマニラ港を出港し、ルソン島の西北沿岸では僚船が米潜水艦の電撃を受け、多数の乗組員兵士が海面で泳いでいる姿を見た。

このため敵潜水艦に対し爆雷を投下しようとしてもそれが出来ず、逆に敵潜水艦は浮上して砲撃して来る。我が輸送船は泳いでいる兵士を激励するのみである。救助していれば本船も危ない。それでマニラに戻り部隊と物資を降ろして直ちに出航、激戦地のコレヒドール島にも別れを告げ、ミランダオ島の西海岸を南下した。

このためレイテ港付近の敵艦隊とは遭遇せず、セレベス島からさらに赤道を南下し、スマトラの

ボルネオ島の沿岸を北上して、ボルネオ島の港で燃料、食糧等を補給し、数隻で船団を組み西方に向う。

私たちの勤務は四時間交代で、夜の十二時から午前四時までが私の勤務時間で、所定の場所に着く。レシーバーを付け船底にある受波器によって敵潜水艦の魚雷発射音をキャッチして司令官へ告げる。任務は受波器を手動に切り替え、真剣に操作して魚雷音をキャッチして「右舷二〇度！ 魚雷音あり」などと司令部へ報告する。

司令官からは「面舵いっぱい！」「前進全速！」「全員戦闘配置に就け！」などの号令がかかる。甲板の時計は二時十五分を指していた。私は受波器を上げて戦闘配置に就く。見張員からも「魚雷！ 魚雷！」と発声があり、全員が配置に就く。

船は大きく右に旋廻したため本船の右舷すれすれに魚雷は通過したが後方の船に命中してしまつた。船団は崩れ、「前進全速」で疾走した。煙突が薄赤くなつていた。そしてようやくシンガポー

ルへ無事たどり着くことができた。碇を降ろして兵器や周りの装備その他の整備を行つて上陸した。

床屋で散髪し、市内を散策して大東亜食堂集會場で休んでいると、けたたましいサイレンが鳴り「空襲警報」と言う。帰艦のため外へ飛び出る。しかし電車は止り、車も皆避難したので走つて帰るより方法がなかった。すると人力車が来たのでこれで帰ろうと話をすると、料金倍払いであれば行くという。了解して人力車に乗り込む。

敵グラマン機数機が機銃掃射をして来た。銃弾は雨アラレのように降つて来る。そんな中を人力車は物ともせず岸壁目指して走ってくれた。その根性には感心させられた。

そして無事帰船、船は碇を揚げて航行を始めた。岸壁で待機していたボートで本船に乗り込むと、船は敵機の空襲に反撃しながら洋上へ出た。

サンジャック港よりサイゴン川を遡上し、サイゴン市に着く。ここで食料及び物資を積み込み、再び台湾に向かって出航した。途中、大型タンカ

ーが魚雷攻撃を受けて流出した油に火がついて火の海となり黒煙を上げている。その中を全速で脱出したが、全く生きた心地はなかった。

ようやく台湾に着き内地から来た艦船と中国福建省沖で船団を組み直し、フィリピンを目指しバシー海峡を渡る。明日はルソン島の沿岸に到着するという前夜、「リンガエン湾内に敵機動部隊あり」との情報にて直ちにUターンして高雄港に引き返す。

港外に停船すると敵潜水艦の攻撃を受けるから湾内に入るようにとの命令だったが、入口は狭い上夜間のため運航に困難しつつも湾内に入り碇を降ろす。十二月三十一日大晦日の日である。ほっと息をする。

正月三日を高雄の港で静かに送ったが、四日には早速「空襲警報」が鳴り、敵機が来襲する。三機編隊のグラマン戦闘機の機銃掃射と爆弾投下の波状攻撃を受けたが、我々の船には被害はなかった。

一月八日も同じく敵機の空襲があり、港内にいた船舶のほとんどは撃破されてしまった。次は十日か十一日だったと思う。起床前だったが「空襲警報」と言ったかと思うと同時に、機銃掃射の弾が兵員室まで打ちこまれてきた。弾の下をくぐり抜けて後部にある砲台に駆けつける。二〇ミリの砲弾を対空信管に切り替えて応戦する。砲弾は敵機編隊の中で炸裂して二、三機を撃墜する。

残念ながら本船も後部甲板に直撃弾が当たり、その破片はみかん箱ぐらいの大きさで、それが私と戦友との間に落下した。どちらかに少しでも寄っていればどちらかが助からなかったと思う。

そのうち後甲板に火がついて燃え上がったので砲台を放棄してブリッジの機銃台に走った。そして射手を交代して敵機に向い引き金を引いた。朝から飲まず食わずで腹ぺこだ。

機銃は引き金を引き続けたので銃口が真赤に焼けたが、冷やす水が無い。船室には海水が入っていて行けず、士官室に行くと酒と缶詰があったの

で持ち帰り銃口を酒で冷やした。

また、我々は空腹に耐え切れず、兵士十人は車座になって酒を飲み軍歌を歌い志気を鼓舞していた。ついに機銃が故障してしまい、また弾も残り少なくなり、司令部より「全員下船せよ」との命令伝達が出た。

デッキに倒れている乗組員の血で、我々も全身血だらけになりながらボートを修復して本船を離れ、司令部へ行く。司令部に着くと司令官の海軍中将以下司令部付将校が出迎えてくれた。

君たちが軍歌を歌い士気を鼓舞して良く戦ってくれた。「ここは危ないから海兵団へ行つて休んでくれ。車は作戦に出いてないので、わしの車を出すから」と言つて中将旗を立てた車に乗り海兵団へ行つた。

新しい軍服と下着も配られ、久しぶりに風呂に入り身も心もさっぱりして休むことができた。兵舎で寝るのは何カ月ぶりか毛布にくるまってすぐに眠った。夜中に「総員退避！」の声を夢うつつ

で聞く。

翌朝、起床ラッパで目をさまして起きて見ると、兵舎には我々以外には誰一人いない。昨夜B29の空襲で総員防空壕へ退避したのだったが、その防空壕へ爆弾が投下され全員戦死したとのことでした。兵舎内は窓ガラスが割れ破片がいっぱいであった。偶然というか兵舎に寝ていた我々は命拾いをしたのでした。

その後毎日昼間にはグラマン、夜はB29と連続空襲で迎撃するに武器も無く退避するのみである。

一月下旬、軍用列車で台北、基隆港へ行き、ここで内地行の船を待っていた。敵機動部隊は沖縄近辺まで北上している。ようやく内地行きの船に乗船したが、航路を上海、青島、大連、朝鮮半島の沿岸沿いを經由して、ようやく祖国の神戸港へ到着することができた。早速、上陸を開始した。

そのとき、敵機が来襲し爆撃を受ける。我先にと上陸したが、行く先々で爆撃を受ける。敵機の攻撃状態を見ながら退避し、ようやく帰国報告の

ため機雷学校にたどり着くことができた。帰国報告後、学校から機雷高等科練習生の辞令を授与され、直ちに久里浜にある海軍機雷学校に入校することとなった。

それまで私は戦地の勤務であったため入校が遅れているのでそれからは日夜を問わず猛勉強の毎日、五月末に卒業することができた。そして左腕には八重桜のマーク、右腕には水兵長のマークが輝いた。

（日本海軍において、「水雷兵器」に着目し、水雷術の研究が始まったのは明治七（一八七四）年ごろである。以来幾多の変遷を経て海軍水雷練習所が明治三十三年に開所され、同四十年「海軍水雷学校条例」により正式に海軍水雷学校が開校している。

当初、水雷術、通信術の教育が行われたが、昭和五年、無線通信の進歩により、この分野は新設の海軍通信学校に移管され、海軍水雷学校は兵科士官、特務士官、准士官、海軍特修兵となるべき

下士官兵に水雷術の教育を行う機関となった。

その教育内容は、魚雷関係と機雷関係に分かれていたが、太平洋戦争を控えた昭和十六年、久里浜に海軍機雷学校が設立され、機雷、爆雷、掃海、水中測的の教育を行う術科学校として予備学生、生徒、予科練出身者が入校、専門教育を受け、配属先で活躍した。

しかし戦局の進展により、敵潜水艦の被害が拡大するようになり、対潜水艦対策の急務から、昭和十九年三月、海軍対潜学校と改称され、担当の護衛艦艇の幹部、兵に対する主として水中聴音の教育が急ピッチで行われた）

私は、その後、海軍久里浜防備隊勤務となり、東京湾に機雷を布設し、敵艦の襲撃に対する防備を行った。金谷沖で作業中、横須賀を空襲した敵機が帰り道に作業していた我々の艦を襲撃して来た。指揮官は総員退避を命じたが、今出では危ないと、機銃掃射中艦内に退避させる。実際に弾の中をくぐった経験者は私だけだった。

そのうち艦は直撃弾を受け沈没のおそれありと見て退艦を命ずる。海に飛び込み岸を目指して泳ぐ兵士に向かって敵機が機銃掃射を浴びせて来る。敵機の飛来方向を見ながら、敵機が近づくと海中へ潜る。銃弾が水中を飛び交う中、どうにか陸にたどり着くことが出来た。着のみのままのぬれ姿で久里浜の学校へと向った。見渡す限り街は焼土と化し見る影もない光景となっていた。

八月十五日ついに終戦となったのです。空襲で破壊された兵舎の片付けや残務整理等を行い、十月下旬に故郷に帰ることができた。

戦いに破れても群馬県の郷里、水上の山野は以前と変わりなく私を迎えてくれた。以後六十数年、祖国日本は再建され、平和な日本に生まれ変わって今日に至っている。この平和日本を恒久に保つてもらいたいと戦争の惨さを知らない世代の方々に祈るのみです。

私の海軍生活二カ年

―海上護衛戦記、その生と死―

京都府 鶴原 甫

私は昭和三（一九二八）年九月生まれで、高等科一年生のときに米英らとの戦いが始まり、後日考えると、まだ良き時代だったとはいえ、就職も自由にならない社会情勢の時代でした。それで周囲の人のすすめもあり、昭和十七年十一月二十三日、海軍を志願して受験し、その場で合格が決まり、翌十八年二月十三日の土曜日、帰宅すると役場より、七月一日、舞鶴海兵団に入団の採用通知が届けられていました。

昭和十八年三月二十七日に高等科二年を修了、入団までの三カ月間、家の手伝いと、発足したばかりの興亜青年学校に学び、六月三十日、多くの人の歓呼に送られて村を離れ、正式には七月五日、舞鶴海兵団長の「海軍二等水兵を命ず」で、昭和